The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	庄垣内正弘教授を偲んで
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 2014, 29, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

庄垣内正弘教授を偲んで

森 安　孝 夫

本誌の創刊者の一人である庄垣内正弘・京都大学名誉教授が，2014 年 3 月 23 日，71 歳で逝去された．日本が世界に誇るウイグル学者をまた一人失ってしまったわけで，我が国の内陸アジア学・敦煌吐魯番学界にとっては痛恨の極みである．ただそれでも，仏教学の百濟康義教授が 2004 年に 58 歳で逝去され，業績を単行本にまとめる余裕がなかったのに比べれば，庄垣内正弘教授は幾冊もの単行本を世に送り出され，しかもそのうち最大の巨冊『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』（京都，松香堂，2008 年）では日本学士院賞の栄誉を受けられたのであるから，恐らくじゅうぶんに満足されて旅立たれたのではなかろうか．その歯に衣着せぬ発言と共に，まさに天晴れな人生であったと思われる．

私と庄垣内さんとは，学会でたまにお目にかかる程度で，個人的に深いおつきあいはなかった．それゆえ，そのお人柄とかエピソードを語ることはできない．その点については，京都大学言語学科の後輩で，神戸市外国語大学では同僚となり，その後は京都大学文学研究科での後継者となった吉田豊教授が『言語研究』第 146 号に寄せられた追悼文が，実に小気味好く紹介されているので，是非とも参照されたい．

私と庄垣内さんとの重大な接点と言えば，それは本誌すなわち『内陸アジア言語の研究』の編集と運営を丸ごと引き継いだことである．これはある意味稀有な事で，その当時は資金ゼロで経営できるのかとか，責任編集が言語学者から歴史学者に移るのに，誌名はもとのままの『内陸アジア言語の研究』でよいのかなど，とかくの噂もあった．恐らく，大方の人はいわゆる三号雑誌的な終焉を迎えると予想していたことであろう．文字通り庄垣内さんが生

みの親である『内陸アジア言語の研究』は，第 1 号（1983/1984）から第 6 号（1990/1991）までが神戸市外国語大学外国学研究所の発行であり，雑誌名としては『神戸市外国語大学外国学研究』が冠だったのである．ところが第 7 号に至って，大学側の事情により刊行予算が打ち切られ，たまたま庄垣内さんがトルコ共和国で海外研修のため一年間留守となった時，庄垣内さんの代理として指揮を任された吉田豊氏から相談を受け，私が後を引き受けることになった．

そうして第 7 号は吉田氏が費用を工面し，アジア大陸の言語研究班という名目で神戸市外国語大学吉田研究室から刊行し，第 8 号以降は私が実質的にオーナー編集長となり，且つ私と吉田氏が中心となって立ち上げた中央ユーラシア学研究会の名前で編集・出版を続けたのである．ただし移行期の誤解や混乱を避けるため，第 8・9 号はまだ発行者を神戸市外国語大学吉田研究室に拠点を置く中央ユーラシア学研究会としていたが，第 10 号からは名実共に大阪大学森安研究室に拠点を置く中央ユーラシア学研究会としたのである．その間，私は庄垣内さんの創刊した『内陸アジア言語の研究』の面目をつぶさないようにと気を配りながらレベルの高い原稿集めに腐心し，その一方で経営基盤を整備するために京都・朋友書店の土江澄男社長に協力を依頼し，販売ルートも確立した．以後，吉田豊氏と二人三脚で，そして第 13 号（1998）からは庄垣内さんの最大の学問的ライバルであるドイツのツィーメ（Peter Zieme）教授を編集陣に加えて発行を続け，斯界では今や押しも押されもせぬ学術誌にまで成長している．欧米の内陸アジア研究が下火となる中，中国だけは逆に盛んとなり，今では『敦煌研究』（1981 年試刊，1983 年創刊），『中亜学刊』（1983 年創刊），『敦煌学輯刊』（1984 年創刊），『西域研究』（1991 年創刊），『敦煌吐魯番研究』（1995 年創刊），『唐研究』（1995 年創刊），『欧亜学刊』（1999 年創刊），『西域文史』（2006 年創刊），『西域歴史語言研究集刊』（2007 年創刊）などが鎬を削っている状態であるが，『内陸アジア言語の研究』はそれらと比べても先輩格として高い水準と名声を維持してきたといえよう．第 26 号（2011）からはオーナー編集長の座を同僚の荒川正晴教授に譲ったが，私の時代の最大の記念行事は第 17 号（2002）を「庄垣内正弘教授還暦記念チ

ュルク学特集号」として出版したことである．そのことも含めて，私は今，天国の庄垣内さんに向かって，創刊者としての名誉はこれからもずっと守られますよと，胸を張ってお伝えしたいのである．

庄垣内さんは御自分でリンギスト linguist と称しておられたように，文献の内容より言語の形式に重点を置く言語学者であり，ツィーメ・吉田豊両教授のような文献学者（フィロロジスト philologist）に比べれば，その膨大な業績に歴史学的要素は薄い．ただし，私が吉田氏の全面的協力を得て『内陸アジア言語の研究』を引き継いだ時，本誌を言語学プロパーの方向に発展させることは考えておらず，やはり内陸アジア史学の基礎となる文字史料を，文献学の手法で処理して活用した論文を，長短にかかわらず掲載することを目標とした．その時，模範として念頭にあったのは，庄垣内さんの全業績の中で最も歴史学の色濃い「‘古代ウイグル語’におけるインド来源借用語彙の導入経路について」(『アジア・アフリカ言語文化研究』15, 1978, pp. 79-110）と，「古代トルコ語 n 方言における ï/i の低母音化について」(『神戸市外国語大学論叢』33-3, 1982, pp. 39-57）であった．両論文は，内陸アジアのトルコ・ウイグル仏教の起源を論じた拙稿「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」(『史学雑誌』98-4, 1989, pp. 1-35）においても，中核となる先行研究として活用させていただいた．

庄垣内さんが日本ウイグル学の父とも呼ばれる羽田亨にいかに心酔していたかは,「羽田亨とウイグル語文献の研究」(『古代文化』50-8, 1998, pp. 49-54）を一読するとよく分かる．それによれば，羽田亨が「先生」と称したのは東大での恩師・白鳥庫吉とロシアのラドロフ（Wilhelm Radloff）の二人だけであったそうであるが，漢文中心になりがちな日本や中国の内陸アジア学に，現地語史料を取り込む手法をいち早く実践したのが羽田であった．それゆえ今の我々には，東洋学の始祖的存在の白鳥よりもむしろ羽田の影響の方が大きいのである．羽田は歴史学者でありながら言語学に深い関心があり，京大では言語学の講義も担当した．その羽田が，多大の興味をもって研究したのが，敦煌莫高窟のモンゴル時代窟より出土した『阿毘達磨倶舎論実義疏巻第一』(大英図書館所蔵 Or. 8212-75A）という表題を持つ漢字混じりウイグル文

草書体の冊子本であり，その成果は「回鶻訳本安慧の倶舎論実義疏」という論文となり,『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』に掲載された．しかしながらいかに語学の天才であれ，この難解なウイグル語写本全体を総合的に読解し，その歴史的背景を解明することはできなかった．その羽田のやり残したところをほぼ完成させたのが庄垣内さんの『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』である．

ところで庄垣内さんと同様に，私自身も羽田亨に私淑し，御両人の論考を取り込みながら「もう一つの敦煌学」を提唱した経緯がある.「もう一つの敦煌学」とは，有名な敦煌蔵経洞（第 17 窟）出土の 11 世紀初頭までの各種文書，とりわけ漢文文書とチベット語文書を研究対象とするいわゆる敦煌学とは別に，モンゴル時代の複数の洞窟から出土した各種文書を総体的に扱おうとするものである．そこでは，漢文以外の文書，とりわけウイグル文書が主体となるが，漢文文書が全くないわけではない．この「もう一つの敦煌学」の成果の頂点に立つものが,羽田を引き継いだ庄垣内さんの業績なのである．実は故百濟教授も同じ文献を仏教学の方面から研究されており，もしも両者が出揃っていたら，さらに完璧になっていたのにと惜しまれる．いずれにせよ，この極めて高い水準に到達したお仕事に対して，私もわずかながら貢献したことがある．それは，ロンドンの大英図書館で作業中に，何とも偶然ながら S. 8514 文書が，元は『阿毘達磨倶舎論実義疏巻第一』（Or. 8212-75A）という表題の冊子本を納めていた袋であることを発見したのである［cf.『東方学』99, 2000, p. 124］．両者を並べて見比べてみると，両方に漢字で書かれた表題は同筆と断定してよく，また冊子本である本体の大きさと復元した袋の縦横の長さと厚さともほどよく合致する．そして両者が共にスタイン（Aurel Stein）自身の手で記入されたと思しき Ch. xix. 001 という全く同じ原文書番号を持っていたのである. S. 8514 は反故となった古い漢文仏典を切り貼りして袋状に仕立てたもので，その漢文仏典の書体・内容・紙質はいずれも蔵経洞出土文書と矛盾しない．つまりここにも，敦煌のモンゴル時代窟出土文書から蔵経洞出土文書への「紛れ込み」の例があったというわけである．

私が庄垣内さんから直接に学問的教示を受けたのは，敦煌出土のチベット

文字で書かれたウイグル語の仏教教理問答 P. t. 1292 について，2 枚のお葉書をいただいた時である．その 1 枚には次のようにある：「このテキストは，……ウイグル語話者の発音を聞いて，その音に基づいてチベット文字表記したもので，正書法をもたない言語書記と考えられます．従って，これの音素転写（transcription）は，当時のチベット語音韻体系とチベット文字の関係を中心に行わねばなりません．」そして，このような仕事は森安君には無理だろうから，チベット学の武内紹人君と組んで，近いうちに自分がやってあげようと結ばれていた．P. t. 1292 文書の研究は，私とドイツのレールボーン（Klaus Röhrborn）・マウエ（Dieter Maue）両教授とが競合してしまっていたので，庄垣内さんがいかなる審判を下されるのか，怖々ながらも心待ちにしていたのであるが，今はもうそれも望めなくなった．

庄垣内さん，日本の東洋学の水準を上げてくださって本当にありがとうございました．『内陸アジア言語の研究』は，荒川正晴教授を責任編集人としつつも，ツィーメ・吉田豊両教授に私もサブとして支えますから，今後も暖かく見守っていてください．

2014 年 5 月 27 日　合掌